

第三十回新能くるす桜上演記念  
妙見法楽連歌 世吉 一卷

平成二十九年八月七日

賦山何連歌

〈初折表〉

ひぐらしに祭さそはれ美濃路哉  
青稲田にも秋風の音  
山峡の暮れ行く空に月待ちて  
しひていそがぬ遠里の宿  
流れくる琵琶の調べの心地よき  
猫は裳裾にいつかまどろむ  
ねむの咲く目覚めの川のなごむ岸  
夏霞わけ棹を連ぬる

裕雄 敏明 泉 一希 了 多美子 千恵 恵美

〈名残折表〉

山近き池のほとりに椅子ひとつ  
おとなにまじりかずたしかめん  
北をさす星の光を探しつつ  
思ひ出はみなうるはしくあり  
持ち重りすれど捨てかね恋心  
疑ひ晴らし逢ふこともがな  
長旅の文をねぎらふ寒の入  
困炉裏の端に地酒頂く  
顔触れを変へて話しは世の動き  
何をありきのこのまつりごと  
をりからに都大路に霧立ちて  
盆の踊りの騒ぎは去りぬ  
月落ちて西や明かりのあまるらん  
はつかに笑まふ埴輪の乙女

敏子 瑞希 加緒莉 千恵 多美子 純一 裕雄 了 多美子 一希 純一 裕雄 了 多美子 一希 了

〈初折裏〉

行く末をのぞみて仰ぐ吹き流し  
朝日に城はかがやくばかり  
関越えは積もりし雪を踏みしめて  
君住む街をひたすら目指す  
三十年を通ひて思ひ叶ふらむ  
寄り添ふ影や神も祝ぐ  
たうたうと流るる水ぞよどみなき  
石の地蔵の赤き前だれ  
夏月は篠脇の上に浮かび出で  
雲さく風の音の涼しさ  
濃く薄く匂ひくる香のしたはしく  
雪消の跡の萌ゆる若草  
天地の恵みゆたかに花の郷  
御寺に聞こゆ鶯の声

加緒莉 敏子 純一 春美 裕雄 加緒莉 千恵 敏子 一希 加緒莉 裕雄 了 純一

〈名残折裏〉

琴の糸ひびき残して里の道  
しばし水音に耳澄まし居り  
夕闇に螢飛びかふ二つ三つ  
蚊遣りの煙消ゆることなく  
子をあふぐ母の団扇はたゆみなし  
空の青さの夏近きころ  
花吹雪幸せの色舞ひあぐる  
永遠に栄えよと囀りの声  
鶴嶺裕雄(大阪狭山市) 五  
日置敏明(郡上市) 一  
木島泉(郡上市) 三  
竹島一希(熊本市) 五  
古田了(郡上市) 四  
渡邊多美子(郡上市) 三  
渡邊千恵(郡上市) 四

千恵 泉 恵美 裕雄 加緒莉 一希 泉 春美 一希 二 五 三 五 三 三 一